平成23年度　　〔試験時間　100分〕

E 7　国　語

この冊子は、国語の問題で1ページより28ページまであります。

〔注　意〕

(1) 試験開始の指示があるまで、この冊子を開いてはいけません。

(2) 監督者から受験番号等記入の指示があったら、解答用紙には志望学科・受験番号を記入してください。解答用マークシートには受験番号及び氏名を記入し、さらに受験番号・志望学科をマークしてください。

(3) 解答は所定の解答用紙に記入したもの及び解答用マークシートにマークしたものだけが採点されます。

(4) 解答用マークシートについて

① 解答用マークシートは絶対に折り曲げてはいけません。

② マークには黒鉛筆(ＨＢまたはB)を使用してください。指定の黒鉛筆以外でマークした場合、採点できないことがあります。

③ 誤ってマークした場合は消しゴムで丁寧に消し、消しくずを完全に取り除いたうえ、新たにマークしてください。

④ 解答欄のマークは横1行について1箇所に限ります。2箇所以上マークすると採点されません。あいまいなマークは無効となるので、はっきりマークしてください。

(5) 試験開始の指示があったら、初めに問題冊子のページ数を確認してください。ページの落丁・乱丁、印刷不鮮明等に気づいた場合は、手を挙げて監督者に知らせてください。

(6) 問題冊子は、試験終了後、持ち帰ってください。

一

次の文章を読んで、後の設問に答えなさい。（45点）

歴史には岐路がある。明治維新（特に明治六年の政変）[1]が岐路であったように、現代も岐路である。「力の文明（アメリカ）」につくか、日本が独自の「美の文明」をきずくかの岐路にあるといってよいだろう。

大久保利通らが渡米経験によって新たに「文明」とあがめたアメリカと伍していかんとし、イギリスのつくりあげた大英帝国の富国強兵ぶりに目をみはり、殖産興業の実をあげて軍事立国による大日本帝国建設の道に乗り出したとき、やがてアメリカと太平洋戦争を戦うにいたるのは必然であった。「富国強兵」路線が敷かれたとき、もうひとつの新しい日本建設の道が閉ざされた。明治一〇年に西郷隆盛が果てた。[2]「敬天愛人」を基本理念とした日本建設の路線が消えた。

西郷南洲の死は今日からふり返って岐路であったというだけでなく、当時にあっても、日本の岐路として認識されていた。西南戦争後、[3]福澤諭吉はただちに『明治十年丁丑公論』を著述した。その緒言にいう――「これを公論と名づけたるは、人のために私するにあらず、一国の公平を保護せんがためなり」と。私情から書いたものではない、というのだ。そして「西郷氏は政府に抗するに武力を用いたる者にして、余輩の考えとは少しく趣を異にするところあれども、結局、その精神にいたっては[4]間然すべきものなし」と、満腔の共感を現した。福澤は西郷の人となりを、こう描く。

武人なりといえども風彩あり、訥朴なりといえども粗野ならず、平生の言行温和なるのみならず、いかなる大事変に際するも、その挙動綽然として余裕あるは、人のあまねく知るところならずや。

それにひきかえ、

政府の官員たる者は、ようやく都下の悪習にならい、妾を買い妓を聘する者あり、金衣玉食、奢侈をきわむる者あり。あるいは西洋文明の名を口実にもうけて、非常の土木を起こし、無用の馬車に乗る等、郷里の旧をすてて忘れたる者のご

とし。これに反して薩摩にいる者は、依然たる薩人にして、西郷、桐野の地位に在るものにても、衣食住居の素朴なること、ごうも旧時に異ならず。

この記述は、内治優先を主張して征韓論をしりぞけながら征台軍を送った政府の矛盾した政策と、政府高官たちの驕りを(5)キュウダンしたものである。鹿児島にもどってからの西郷は不平士族にあるべき姿を示そうという思いがあってのことであろう、帰農生活をして範を示し、私財を投じて学校をつくって青年教育にあたっていた。

さらに福澤はいう、「西郷はけっして自由改進を嫌うにはあらず、真実に文明の精神を慕う者というべし」「人民の気力の一点について論ずれば、第二の西郷の生ずるこそ、国のために祝すべきことなれども、これを生ぜざるを如何せん。余輩はかえってこれを悲しむのみ」「西郷は天下の人物なり」と。

明治一〇年、日本が殖産興業政策で富国強兵の道を歩みはじめたとき、福澤はそれに抵抗する「真に文明の精神を慕う第二の西郷」の出現を渇望したのである。

勝海舟は「城山」を残した。琵琶の曲として今日、広く親しまれているものだ。

それ達人は大観す。抜山蓋世の勇あるも、栄枯は夢か幻か。大隅山のかりくらに、真如の月の影清く、無念無想を観ずらむ。

何をいかるかいかり猪の、にはかに激する数千騎、いさみにいさむはやり雄の、騎虎の勢ひ一徹に、とどまり難きぞ是非もなき。

唯身ひとつをうち捨てて若殿原に報いなむ。明治ととせの秋の末。

諸手の軍うち破れ、討ちつ討たれつやがて散る、霜の紅葉のくれなひの、血しほに染めどかへりみぬ、薩摩たけ雄のをたけびに、うち散る弾は板屋うつ、あられたばしる如くにて、おもてをむけんかたぞなき。木だまにひびくときの声、もののいかづち一時に、落つるが如きありさまを、隆盛うち見てほほぞ笑み、あないさましの人々やな、亥の年以来やしな

ひし、腕の力もためし見で、心に残ることもなし、いざもろともに塵の世を、のがれ出でむはこの時と、唯ひとことをなごりにて、桐野村田をはじめとし、むねとのやからもろともに、烟と消えしますら雄の心のうちこそいさましけれ。

官軍之を望み見て、きのふまでは陸軍大将とあふがれ、君の寵遇世の覚え、たぐひなかりし英雄も、けふはあへなく岩崎の、山下露の消え果てて、うつればかはる世の中の、(6)ムジョウを深く感じつつ、無量の思ひ胸にみち、唯粛然と隊伍を整へ、目と目を合はすばかりなり。折りしもあれや吹きおろす、城山松の夕嵐、いはまにむせぶ谷水の、非情のいろもなんとなく、悲鳴するかと聞きなされ、戎衣のそでもいかに濡らすらむ。

徳川方の参謀であった勝が、徳川を滅ぼした西郷の死をかくも惜しんだのは記憶されるべきである。

内村鑑三は『代表的日本人』を著して、その冒頭に西郷隆盛をあげ、明治維新のリーダーとして木戸・大久保・岩倉らの名は逸することはできないけれども、かれらに代わりうる人は出現しえた。しかし、西郷に代わりうる人物はいない。西郷は新しい日本建設の「出発合図者(スターター)であり、方向指示者(ディレクター)であった」。そしてこう断定する、「明治元年の日本の維新は西郷の維新であった」と。しかるに、明治一〇年、「新日本の建設者」「敬天愛人の武将」「武士の最大なるもの、また最後の(と余輩の思う)ものが世を去った」。

西郷隆盛ほど、その死が惜しまれた人物はいない。

敬天愛人とは(7)『西郷南洲遺訓』にいわく、「道は天地自然のものにして、人はこれを行うものなれば、天を敬するを目的とす。天は人も我も同一に愛したまうゆえ、我を愛する心をもって人を愛するなり。人を相手にせず、天を相手とせよ、天を相手にして、己れを尽くして人をとがめず、わが誠の足らざるをたずぬべし」というものだ。

『西郷南洲遺訓』に「もしこの言(8)(「子孫のために美田を買わず」)にたがいなば、西郷は言行反したるとて見限られよと申される」とある。有言実行、言行一致は西郷の生涯の特色である。

西洋文明の弱肉強食ぶりに批判的であった西郷の敬天愛人の道は、キャッチアップ路線にはならなかったであろう。すでに

明治維新の前年の一八六七年、マルクスは近代イギリス社会をトータルに批判する『資本論』を著していた。社会主義による資本主義の克服の道を説いたのである。社会主義による英米資本主義克服の道は、ロシア革命から冷戦崩壊までの二〇世紀の社会主義の実験が失敗したことにより、もはや未来はない。

同じ時期に、革命家西郷隆盛は、社会主義とは異なる英米資本主義の克服の道を構想していた。社会主義が西洋社会の内部からの英米的「文明」への告発であったとすれば、西郷の構想したのは西洋社会の外部における東洋的「文明」の建設であった。それは未完の革命として今日までひきずっている。では、未完の革命の中味は何か。

『西郷南洲遺訓』にいう、「政の大体は、文をおこし、武をふるい、農をはげますの三つにあり。その他百般の事務はみなこの三つのものを助くるの具なり」と。

「文をおこす」とは、万民が学徳をみがくということである。

「武をふるう」とは、軍国主義を張ることではない。軟弱であってはならないということの言いかえであり、必要とあれば戦う力も用意もあるが、日ごろはそれを用いず、慎み深く平和を守る人士であれという意味である。西郷は「善く士たる者は武ならず、善く戦う者は怒らず」という、老子の「不争の徳」を持った人である。

「農をはげます」とは、一身自立の基礎を説いたものである。

西郷をもって軍国主義とみなすのはおおいなる誤解である。

『西郷南洲遺訓』を編んだのは、かつて西郷の率いる官軍に敵した庄内藩士である。庄内藩との戦争に入る前、すでに長岡藩との戦いで隆盛の愛弟は戦死している。東北戦争は激戦であった。庄内藩主の酒井忠篤は降伏した。降伏の式が終わると手厚くもてなされ、はずかしめられなかった。庄内藩士はそれに感激した。

明治三年、酒井公はじめ旧庄内藩士数十人が鹿児島にいた西郷隆盛を訪れ、教えをこうた。そのときの記録が『西郷南洲遺訓』である。『遺訓』が最初に出版されたのは庄内においてであった。薩摩人が身びいきで書いたものではない。かつての敵側の人士によって編まれたのである。西郷は庄内藩士をその徳によって感化したのである。(9)

明治三年に、なぜ西郷は鹿児島にいたのか。東北平定後、西郷は薩摩人や薩摩藩主が天下をとったかたちになるのはよくないと考え、帰国し帰農の生活にはいったのだ。「命もいらず、名もいらず、官位も金もいらぬ人」を文字通り地でいったのである。鹿児島で無為にすごしていたのではない。土地財産を農民が平等に持てるようにし、維新の功績で贈られた「永世二千石」全額を学校づくりに寄付した。「正三位」という官位も返上した。

懇請されて政府に戻ったのが明治四年である。

西郷は何をしたか。廃藩置県を断行したのである。旧藩主の激高は想像にあまりある。日本が江戸時代の分権国家から中央集権国家に変わったのは革命である。それは西郷の力なくして不可能であった。しかも、無血でそれを断行したのである。明治四年に西郷が政府にいなければ、岩倉・大久保・木戸らは欧米視察には出られなかったであろう。岩倉使節は留守政府をあずかる西郷がいてはじめて実現できた。

大久保が帰国したあと、西郷は下野した。その後の大久保路線は近代的に見える。それにひきかえ西郷は外国の事情にうとく、守旧的であるとみられてきた。それは誤解[10]である。それは彼の経歴を見ればよくわかる。

西郷隆盛は一八二七年に七人兄弟姉妹の長男として生まれた。一八五二年、隆盛が二五歳のときに不運にも父母を亡くした。あとは隆盛が六人の弟妹の親がわりになった。その当時の彼の仕事は、今日でいえば農業調査である。その仕事を一七歳から行なっており、薩摩の経済には精通していた。算盤(そろばん)の名人であったというイツワ[11]もある。

幕末の名君のほまれ高い島津斉彬(なりあきら)(一八〇九～五八)が薩摩藩の第二八代藩主に就任したのは一八五一年。島津斉彬は西郷の農事調査にもとづく上申書の優れているのに感じいって隆盛(当時、吉之助)を小姓(こしょう)にとりたてた。これが西郷隆盛が政治の表舞台へ出るきっかけになった。

島津斉彬は藩主に就任するや集成館事業[12]にとりくんだ。集成館事業とは、狭義には同年から五八年夏に斉彬が急死するまでの、足かけ八年間の事業をさすが、斉彬の死後も事業は発展的に継承され、広義には幕末・維新期の薩摩藩の事業全体をさすものだ。

集成館は桜島と錦江湾を見事に借景にとりこんだ磯公園（仙厳園）の一角にある。磯公園は一七世紀に造園された代表的な大名庭園であり、いまは広く市民に公開されている。夏には、朝顔展が開かれる。田村省三氏（集成館館長）によれば、集成館事業を始めた島津斉彬の唯一の趣味が朝顔のサイバイ[13]であった。それを記念して、夏の磯公園には少年少女が丹精込めた数千の朝顔が繚乱と咲く。

斉彬が手がけた事業の主なものだけでも、反射炉・溶鉱炉の建設、薩摩切子で名高いガラス、鍛冶場、日章旗を掲げた最初の洋式軍艦「昇平丸」で知られる造船事業、薩英戦争で戦果をあげた造砲、洋式銃・火薬・雷管製造、紡織・紡績、写真、農具改良、電信、製薬、印刷などのほか、留学生派遣の試みなど二〇余りにも及ぶ。これら工場群に働く人々の数は一日一二〇〇人にも及んだ。

それは殖産興業による富国強兵をめざした近代化事業であり、明治政府の政策を先取りし、以後の日本が発展させたものである。その原型が集成館事業である。

ちなみに集成館の工場群は、薩英戦争の際に、英国軍人が「これを友人に見せることができるならば死んでもよい」とまで賛嘆した、美しく草花の匂う景観の中にある。それは、同時代のマルクスやエンゲルスが憤った英国における陰惨な近代工業都市の景観とはほど遠い。絵のように美しい。

島津斉彬は隆盛にそれを間近に見せ、その意義を語り聞かせ、そして一八五四年には隆盛を江戸に連れていった。隆盛二六歳のときである。それから島津斉彬の急死する一八五八年、隆盛三一歳になるまでの足かけ五年間、隆盛が過ごしたのは江戸である。江戸では島津斉彬の信任があつく、松平春嶽、阿部正弘、徳川斉昭など名君に斉彬の名代として直接会っているほか、藤田東湖をはじめ当代の知識人とまじわっている。

これらの経歴は、西郷隆盛が幕末の政治状勢や当時の最新の知識において、群を抜いて知悉していたことを意味している。一九世紀の中葉、非西洋圏の諸地域が、富国強兵を地でゆく欧米列強諸国の支配下にはいるなかで、日本がひとり政治的独立を堅持し、経済発展をとげたことは世界史の奇跡である。その先導的役割をはたした事業が、すでに鹿児島に起こってい

た。これらの実績をもっともよく知る西郷隆盛を非近代的というのは誤りである。隆盛が後に、鹿児島の若者に福澤諭吉を読むように勧めていたのは意外なことではない。西郷隆盛は西洋近代の動向を注視していたのである。

西郷隆盛は藩主斉彬の死を聞いて殉死せんとした。『西郷南洲遺訓』とともに『島津斉彬言行録』をひもとけば、その人格・識見の高さにおいて両者は共通している。無私の精神で藩の利害を超え、新しい日本を建設するという志において両者の精神は共鳴しているのだ。日本がアジア最初の近代国家になりえたことは奇跡だ。その先駆的モデルの集成館の景観が美しいだけでなく、その事業を推進した斉彬と、その最良の家来隆盛が精神においても気高いのは、さらなる奇跡である。

島津斉彬の死後、隆盛は新しい藩主に誤解され、奄美大島に一八五九年から六二年まで三年間流された。さらに一八六二年から六四年までの二年間は徳之島、ついで鹿児島から五七〇キロも南に離れた沖永良部島に流された。維新に先立つ一〇年間の大半を島流しの身で過ごしたのである。南洲の名はその体験にちなんだものであろう。

ついでながら、江戸時代は「鎖国」といわれるように、海外交流の窓口を長崎に限り陸地志向・農本主義的な日本の顔が支配した。しかし、日本には海洋志向の顔がある。それを陸地志向の徳川幕府は完全に押さえ切れていない。江戸時代には松前藩、対馬藩、そして薩摩藩が海洋日本を体現していた。松前藩は五万石、対馬藩は一〇万石、琉球をカンカツ[14]した薩摩藩は七〇万石で最大である。つまり、薩摩藩は「海の日本」の代表である。

集成館が海洋にちなんだ「磯公園」の名をもつ庭園の中にあるのも、「海の日本」を象徴するものであろう。集成館事業は、陸地志向の日本が海洋志向にギァ・チェンジする媒体になったのである。

薩摩藩は海との係わりを抜きに考えられない。藩財政を建て直した調所広郷は琉球を通じ海洋貿易を展開した。調所を抜擢した島津重豪は蘭癖大名といわれるほど海外に眼を開いていた。斉彬がもっとも影響を受けたのも重豪であった。斉彬は「琉球通宝」を鋳造していて、その一枚が集成館に展示されている。天保通宝とウリ二つだ。「琉球」を「天保」と変えれば天下に通用したであろう。卓越した財政感覚だ。朝顔の似合う集成館を含む錦江湾・桜島は、アジア近代化の最初のモデルとして世界遺産にも値するものだ。

鹿児島は南国特有の風光明媚で温暖な土地柄に恵まれている。そのような風土で育つせいか、鹿児島の人は人情が厚く、温厚で明るい。普段は穏やかな鹿児島人だが、いったんこれと決めると、ブレない士風がまだ残っている。

一六〇〇年の関ヶ原の合戦において、徳川家康の率いる東軍と石田三成の率いる西軍が激突し、東軍が勝った。西軍についた島津義弘軍は、敗色濃厚となり、あわや全滅という危機のなかで、大決断をする。死中に活を求め、相手の意表(15)をついて、敵陣の中央突破を敢行した。友人が倒れ、親兄弟が倒れてもひるまず、敵の中央を真一文字に突き進んだ。薩摩まで帰還できたのは八〇名ばかり。薩摩隼人の勇名を天下にとどろかせた天晴れな戦いぶりである。

徳川幕府は島津藩を取り潰さなかった。いや、本気で闘ったときの薩摩武士の強さを知っていたから、潰せなかったのであろう。「孤軍奮闘、囲みを破って還る」――この勇猛ぶりは、近代日本の最大の内戦である西南戦争でも発揮されたのである。

西郷の生地を訪ねると、甲突川の傍らで吉之助少年が川の流れの先にそびえる活火山・桜島を仰ぎ見て育ったことが一目瞭然だ。そのことを知った上で江藤淳『南洲残影』を読み返してみた。(16)西郷の最期を江藤淳氏はこう描いている。

流れ弾が西郷の股と腹に当った。その瞬間、西郷が、傍らの別府晋介を顧みていった。「晋どん、晋どん、もうこの辺でよかろ」。負傷のために、西郷は起つことができなかった。その場に徐ろに跪座し、襟元をつくろうと、西郷は双手を合わせ、はるかに東天を拝した。彼を『賊』として追討することを命じた天子に、最後の(17)衷情を尽したのである。

江藤氏と同じころに、桶谷秀昭氏も西郷の伝記『草花の匂ふ国家』を書いている。同じ場面を、桶谷氏はこう描く。

弾が股部と腹部を貫いた。「晋どん、晋どん、もうここでよかろう」。西郷は起つことができず、跪座して襟を正し、遥か東方の空に双手を合わせて拝した。

そこに「天皇云々」の記述はない。江藤氏の「天皇に最期の衷情を尽くした」という解釈の適否は疑いうるのではないか。

こころみに、西郷が戦死した場所に立ってみるべし。そこから東天を望み見るべし。東天には堂々たる桜島の勇姿がある。

東天をあおいだ西郷の眼に映じた最後の残影が、子供のころから仰いできた桜島であったことは明らかである。

城山に立てば、眼前には紫煙る桜島、眼下には鏡面のごとき静かな錦江湾を望む。桜島は「動」、錦江湾は「静」の象徴である。静動一如の絶景である。この風土の形を前にするとき、それが西郷の心の形であったことに思いいたるであろう。

それは同じ景観を見て育つ鹿児島人の心の形でもあろう。人の心の原形は風土によってはぐくまれる。鹿児島にその風土があるかぎり、「第二の西郷」の生ずるのは夢ではない。国土を各人各様に育てて自立する、すなわち「農による自立」が「農をはげます」という一語こそ西郷がこめたメッセージにちがいない。西郷は西南戦争の直前までそれを実行していた。

西郷隆盛は、海のごとき深い静けさと、天を抜くばかりの果敢な行動力が一人格のうちに統合された革命家(18)である。

（川勝平太氏の文章に基づく）

問一　傍線部(1)「岐路」について、西郷隆盛が進もうとしていた方向はどのようなものか、**解答用紙**に答えなさい。

問二　傍線部(2)「敬天愛人」について、西郷隆盛の教えを記した書物の中で説明している部分を最初と最後の五文字で**解答用紙**に示しなさい。

問三　傍線部(3)「福澤諭吉」は西郷隆盛についてどのように評価していると述べているか、次の**ア**～**オ**からもっとも適当なものを選んで、その記号を**解答用マークシート**に答えなさい。

ア　ことにあたるに武力的手段に重きをおき、最後には敗死してしまった急進的革命家
イ　当面の利害から判断し、少々の矛盾があっても、現実的に対応できる実務家
ウ　東洋的文明の精神に基づいて国を作ろうとした、再来を願うほどの理想主義者
エ　守旧的で、自由改新を嫌い、基本的原則からの逸脱を許さない保守論者
オ　明治維新を押し進め、大名の抵抗を押し切って廃藩置県を遂行することができた天下の英雄

問四　傍線部(4)「間然」、傍線部(9)「感化」、傍線部(15)「意表」、傍線部(17)「衷情」はどのような意味か、次の**ア**～**オ**からもっとも適当なものを選んで、その記号を**解答用マークシート**に答えなさい。

(4)　「間然」

ア　間者のように油断なく注意を働かせている様子
イ　非難すべき欠点があるさま
ウ　隙間が多くて茫洋(ぼうよう)とした様子
エ　すぐれていて何も短所がない様子
オ　世間の俗にまみれて品がないさま

(9) 「感化」

ア 心を変化する動態としてとらえること
イ 感想をまとめて一冊の本にすること
ウ 感動を与えることによって善導すること
エ 他に影響を与えて心を変えさせること
オ 反対者を納得させて正しい意見に導くこと

(15) 「意表」

ア 考慮にいれていないこと
イ 考えをまとめて表現すること
ウ 命令・意志にそむくこと
エ 積極的に何かしようとすること
オ ある問題についての考えたこと

(17) 「哀情」

ア 悲しみ憂える心
イ 敬い尊ぶ心
ウ 他者をいたむ心
エ 偏りのない心
オ まことをもった心

問五　傍線部(7)『西郷南洲遺訓』は、どういう人が編集し、どういう記録を、どこで初めて出版したというのか、**解答用紙**に答えなさい。

問六　傍線部(8)「子孫のために美田を買わず」は具体的にどのような行動として示されたのか、**解答用紙**に答えなさい。

問七　傍線部(10)「誤解」とはどうしてそう言えるのか、**解答用紙**に答えなさい。

問八　傍線部(12)「集成館事業」の意義を端的に示す言葉として、次の**ア**～**オ**からもっとも適当なものを選んで、その記号を**解答用マークシート**に答えなさい。

ア　西洋的工業都市のモデル
イ　田園都市構想のモデル
ウ　日本の近代化の先駆的モデル
エ　磯公園をはじめとする大名庭園のモデル
オ　欧米的工業化のモデル

問九　傍線部(16)「西郷の最期」について、東天を仰いだ西郷隆盛の思いをどのようなものであったとするか、文中に述べられている二種の異なった見解を**解答用紙**の二つの枠に分けてそれぞれ説明しなさい。

問十　西郷隆盛の考え方について、次の設問に答えなさい。

(A)　傍線部(18)「革命家」西郷隆盛が成し遂げられなかった革命の内容はどのようなものか三つに分けて**解答用紙**に説明しなさい。

(B)　その中で、西郷隆盛がもっとも伝えたかったことを筆者はどういうこととととらえているか、**解答用紙**に説明しなさい。

問十一　傍線部(5)「キュウダン」、傍線部(6)「ムジョウ」、傍線部(11)「イツワ」、傍線部(13)「サイバイ」、傍線部(14)「カンカツ」のカタカナの部分を漢字に直して**解答用紙**に答えなさい。

左のページは白紙です。

二

次の鎌倉時代の日本語について説明する文章を読んで、後の設問に答えなさい。（55点）

源頼朝が関東の地鎌倉に幕府を開いた一一九二年より、後醍醐天皇による建武の中興（一三三三年）までの約一四〇年間が鎌倉時代です。この時代は短いにもかかわらず、平安時代の貴族を中心とした政治体制が終わり、中央に進出した武家による政治が行われた日本の歴史における一つの大きな変革期でした。中世を鎌倉時代から始めることは、荘園（しょうえん）制のスイタイ(1)、守護・地頭の設置などの社会経済史的な見方によりますが、このような政治における変革はさまざまな面での社会や文化の変革をひきおこし、それが必然的に日本語にも反映しました。ただ、このような変動の波は、摂関政治が崩壊した院政時代から起こっていました。一〇八六年に白河上皇が院政を行うようになりますと、旧来の社会構造、経済生活が大きく変わり、一つの頂点を形作った古典語にも綻（ほころ）びが見え始めます。そこで、脱古典語の幕開けという時代意識を重視して、院政時代を鎌倉時代と一括して扱います。

さて、文化面で見ると、社会経済システムの変動を背景にして、文化の担い手も平安時代までの貴族や学者から、一般僧侶（そうりょ）や武士、一般大衆にまで拡大していきました。

武士たちは、中央貴族の伝統的教養基盤である漢文から疎遠になる傾向がありました。そして、一般大衆の台頭もあって、難解な漢字を用いる漢文よりも、耳から聞いて理解しやすい仮名による平易な文章が求められるようになりました。鎌倉新仏教を開いた一人である法然は「ヤマトコトバハソノ文見ヤスク、ソノ意サトリヤスシ」（『黒谷上人灯録』）と述べています。一般大衆をも意識した言語観が現れていて、貴族文化から大衆文化へという一歩がこうして踏み出されました。つまりは、和語と仮名がこの時代を特徴付けるものとも言えます。(2)

その仮名の使用という面では『阿弓河（あてがわの）庄上村百姓等言上状』（一二七五年）が象徴的な資料です。(3)

阿テ河ノ上村百姓ラツゝシテ言上

一　フセタノコトリヤウケノヲカタエフセ

シツメラレテ候ヲソノウエニチトウノ
カタエマタ四百文フセラレ候ヌマタ
ソノウエニトシヘチニ一タンニ二百文ツツノ
フセレウヲセメトラルゝコトタヘカタク候　（中略）
ケンチカンネン十月廿八日
百姓ラ申上

【釈文】阿弓河の上村百姓等、謹（ん）で言上（す）
一　臥田の事、領家の御方へ臥せ鎮められて候を、その上に地頭の方へ又四百文臥せられ候ぬ。又その上に年別に一反に二百文づつの臥料を責め取らるること堪へ難く候。（中略）
建治元年十月二十八日　百姓ら申上（ぐ）

「ふせだ」は領主に報告しない耕作地のことで、その臥田を領家（荘園領主）には認めてもらっているのに、地頭（幕府側の管理者）にも過酷な年貢を納めさせられていることを訴える内容ですが、地方の農民階層でも一部の階級では、片仮名および一部の漢字を習得していたということがわかります。そして、片仮名は実用的であって、まず片仮名から仮名の習得がなされていたであろうことも推察できます。また、どのような漢語が使用されていたかなど、庶民の言語生活を知る上で重要な資料です。

一方、漢字・漢文は公式の文字・文章として尊重され、漢文訓読体も踏襲されました。その保守的性格という点で言えば、平仮名文も同様に前代の文法・語彙などを継承していきました。しかし、話し言葉で新しい言い方がジョジョ[4]に広まっていったことから、書き言葉にも和文語と漢文訓読語が混淆するという変革がもたらされ、平安時代まで対立していた両者が融合して、和漢混淆文が生じました。[5]『平家物語』の文章がその代表で、実用的な文体として中心的位置を占めるに至りました。

平安時代の旧守的な言語体系(古典語)を継承する一方、日常の話し言葉において新しい言い方が勢力を得て、次第に拡大していきました。すなわち、書き言葉(文語)と話し言葉(口語)との乖離(かいり)です。(6)係り結びの消滅、(7)「イ」と「ヰ」、「エ」と「ヱ」の混同など近代語への過渡的な様相を示していますが、それは残された文献から口語的要素を見いだすことで明らかにすることができます。こうして、ここに(8)「言文二途の時代」が始まったのです。たとえば、その文章が擬古文と称されることもある(9)『徒然草』(一三三〇年頃成立)には次のような記述が見えます。

延政門院いときなくおはしましける時、院へ参る人に御ことづてとて申させ給ひける御歌、

ふたつもじ牛の角もじすぐなもじゆがみもじとぞ君はおぼゆる

こひしくおもひ参らせ給ふとなり。(徒然草　六二)

これは、「ふたつもじ」は漢数字「二」と類似する「こ」を、「牛の角もじ」は牛の角のような文字「ひ」を、「すぐなもじ」は真っ直ぐに書かれる文字「し」を、「ゆがみもじ」は歪(ゆが)んだ形をした「く」を意味し、この仮名を続けると「こひしく」となり、あなたのことを恋しく思っておりますという内容の和歌を送ったというものです。ここで注目されるのは、形容動詞「すぐなり」の連体形語尾が「なる」ではなく「な」となっていることです。すなわち、連体形活用語尾末尾の「る」が脱落したもので、「静かな海」(古典語では「静かなる海」となるべきところ)という現代語と同じ言い方になっているのです。このような言い方はすでに『和歌童蒙抄(わかどうもうしょう)』(一二世紀中頃成立)に「いかなること」(古典語では「如何なること」)と見えますから、院政時代から始まった変化であったのです。

連体形活用語尾「る」の脱落は過去の助動詞「た」についても同様に見られました。『金葉和歌集』(一一二七年成立)の連歌・六九二には、次のように「来た(北)」と「来し(越)」とを掛けた例が見られます。

ゐたりける所の来たのかたに、声なまりたる人のものいひけるを聞きて

あづま人の声こそ北に聞こゆなれ〈永成〉みちのくによりこしにはあるらん〈慶範〉

これは、永成が「東国の方言では『きた』と言っている」と歌ったのに対して、慶範が「陸奥から『来し』（中央語では『来た』の意）ということなのだろう」と詠んだものです。すなわち、東国では「来たる」を「来た」と言っていたようで、院政時代の東国方言では連体形語尾の「る」を脱落させた言い方が広まっていたことがわかります。おそらく、そのような言い方が都の話し言葉にも影響を与えて、「る」の脱落が進行していったものと考えられます。

ちなみに、東国方言については、千葉県中山法華経寺蔵『三教指帰注』、日光輪王寺蔵『諸事表白』などの資料からその特徴がうかがえ、東日本と西日本の言語の対立がすでに生じていたことも知られます。

さて、院政時代から鎌倉時代にかけて活躍した人に藤原定家（一一六二～一二四一）がいます。『新古今和歌集』の編纂に携わった歌人として有名ですが、文献考証学者としても大いに活躍しました。

藤原定家は数多くの古典を書写し、また校訂しました。今日私たちが読む『源氏物語』の本文は「青表紙本」と呼ばれるものに基づくのが普通ですが、これは定家がさまざまな写本に基づいて校訂したものです。別の言い方をすれば、『源氏物語』は紫式部の著作ではありますが、その本文は定家によって整えられたものなのです。また、『伊勢物語』も「天福本」という写本に基づく本文を私たちは読むのが一般的です。これも定家が書写したものですし、『更級日記』に至っては定家による写本が唯一今日に伝わったものです。このほかにも数々の古典を写本として残しているのですが、自身が接した古典の本文に仮名遣いがかなり混乱していることを痛感するに至りました。

『下官集』という歌論書の中には、仮名の用い方について自身の主張を述べている箇所があります。まず仮名の混用について留意する人が少ないことを嘆き、古くから仮名遣いの乱れはあるが、今の時代はさらにはなはだしくなっていて、まことに残念であると記した上で、「を」「お」の仮名遣いについて実例を挙げて指針を示しました。

その基準は、日本語のアクセントで高く発音する[wo]を「を」で、低く発音する[wo]を「お」で書くというものでした。今日

の共通語でいえば、「おび」(帯)は「オ」が高く、「ビ」が低く発音されます。この場合は高い「オ」ですから「を」を用いるという主張です。アクセントの高低による「を」「お」の使い分けは、すでに一一世紀から、たとえば真福寺本『将門記』承徳三(一〇九九)年点などにも見えますから、定家の独創ではなく当時一部に行われていた方法を自らも採用したようです。このアクセントの高低による「を」「お」の使い分けは、「いろは歌」における「散りぬるを(助詞「を」は高く発音されました)」と「有為のおくやま(「奥山」のオは低い発音でした)」におけるアクセントの高低を反映させたものです。「い」「ひ」「ゐ」、「え」「へ」「ゑ」については、その仮名遣いを平安時代の旧草子類に基づいて定めたようですが、定家が根拠とした写本には、音韻が混乱した平安時代後期のものもあったらしく、「追」は「おひ・おい」の両用を記し、「音」は「をと」、「植」は「うへ」とするなど、歴史的仮名遣いの「おと」「うゑ」とは異なるものもあります。いずれにしても、仮名遣いを初めて主張し、それを自ら実践したことの意義は大きく、藤原定家の歌道における権威の下に、この「定家仮名遣い」は歌人の間では江戸時代に至るまで行われました。

(中略)

漢字は引き続き公式の文字であり、漢文はやはり伝統的な教養の基盤でした。鎌倉幕府の記録書『東鑑』は漢文ではあっても、和化された要素の多い、いわゆる変体漢文で書かれました。漢文訓読調の流れを引く類型的な表現に基づき、日本化された漢字の用法も散見されます。たとえば、副詞の「定」に対して文末に「歟」を呼応させて「定めて……か」としたり、「豈……哉」〈あに……や〉、「云……者」〈いはく……てへり〉、「縱……雖」〈たとい……とも〉など、その独特の文体は「東鑑体」とも呼ばれています。

俗字も多く用いられ、漢和字書の観智院本『類聚名義抄』[12]には「俗字」注記が多いことも漢字使用の広がりを示すものです。このような漢字の隆盛は、本来の漢字表記でない当て字を増加させました。

上ド(浄土)　二色(錦)　目出タシ(めでたし)　酒月(盃)　人見(瞳)　浅猿シ(あさまし)　裏病(うらやまし)

仮染(かりそめ)　心みやう(身命)

また、(13)「抄物書」といって字画の一部を省略する方法が僧侶などの間で盛んに行われました。

酉酉(醍醐)　九九(究竟)　鳥鳥(鷦鷯)　女女(娑婆)　玉玉(瑠璃)　尺(釈)　广(摩または魔)　四(羅)　宀(密)　厶(厳)

『徒然草』には「しほという文字はいづれの偏にか侍らん」(一三六段)という記述もあり、当時の人々が漢字に対して高い関心を持っていたことがわかります。この「しほ」とは「鹽・塩」のことです。

仮名は、わかりやすい文章のために用いられることが次第に多くなります。もともと漢文であった書物が平仮名を中心とした漢字仮名交じり文で書き直されることもありました。『仮名書き往生要集』(一一八一年)、足利本『仮名書き法華経』などの出現は、仮名が多くの人々の中に浸透していったことを(14)ニョジツに示しています。

片仮名の字体は、前代では漢字の字画を省略した形を色濃く残していました。しかし、鎌倉時代に入ると、少しずつ独自の字体へと変化していきます。たとえば、「ウ・ツ・ラ」などの終画のはらいが次第に長く鋭角的になっていったり、「シ・ル・レ」などの終画のはねが鋭角的になったりしました。これは、片仮名が漢文訓読の場において漢字に従属していたものであったのが、次第に表記用字として漢字から独立していったことと大いに関係があります。

ところで、『宇治拾遺物語』(三・七)には、嵯峨天皇が片仮名の「ネ」の文字を十二書かせて、小野篁に読ませたところ、みごとに解読したという説話が載せられています。では、その十二字はどう読まれたのでしょうか。出題を再現してみましょう。

《問い》「子子子子子(15)子子子子子子子子(16)」の文字列を解読しなさい。

どうでしょうか。平安時代前期の学者であり漢詩人である小野篁は博学で知られていました。ですから、出題も難問が課されることになります。ヒントを出しますから、もう一度考えてみてください。

《ヒント》(1)　片仮名「ネ」には「子」という異体字があります。

(2)　「子」は音で「シ」、訓で「コ」と読めます。

すなわち、「子」は十二支の「ね」に当たり、片仮名「ネ」の異体字としても用いられていたのですが、そこで、小野篁の解答です。

《解読》ねこの子のこねこ、しし(獅子)の子のこじし(子獅子)。

この説話は、当時まだ片仮名の異体字がふつうに用いられていたことを示すものと見られます。ただし、鎌倉時代の中期になると、片仮名はジョジョ[4]に今日に近い字体に統一され、また一音節一字へと整理されていきました。

片仮名主体の文章表記は僧侶や学者たちの間で広がり始め、説話集である『打聞集』『宝物集』、随筆の『方丈記』などのほか、講義録である『法華百座聞書抄』などの仏典の注釈、日常のビボウロク[17]などに広く用いられました。

仮名と漢字が交用されるようになりますと、仮名の部分を多くして読み誤りを避けようとした「水ツ・夜ル・間タ」などの捨て仮名[18]や活用語尾などに送り仮名を付すことも広まりました。

また、促音は院政時代までは無表記でしたが、鎌倉時代に入りますと、「サツシホドニ」(去りし程に)(草案集　一二一六年写)のように「ツ」の表記が見えるようになります。そして、後期になると、一般的に用いられるようになりました。

平安時代には和文語と漢文訓読語という対立がありましたが、鎌倉時代になると、そのような文体の違いによる語彙の区別が次第に曖昧になっていきます。その結果、和文体・漢文訓読体とは別に、この両者を統合した新たな文章様式(和漢混淆文)が生じました。

この時代の語彙の特徴としては、「はたと」「むずと」「しやつ」「ちつと」などの日常用いる平易な和語も文章語として用いられる一方、漢語語彙が一般に浸透したことは、本邦初の国語辞書ともいうべき『色葉字類抄』(橘忠兼撰　一一六四～八〇年成立)に多くの漢語が収められていることからも知られます。また、『平家物語』では、異なり語数で和語より漢語の方が多く用いられているという調査もあります。このような漢字尊重という前代からの流れの中で、和語が漢字表記され、それを音読した結果、「返事(かへりごと)」「火事(ひのこと)」などの和製漢語[19]が作り出されました。

かへりごと → [漢字表記] 返事 → [音読] ヘンジ

ひのこと → [漢字表記] 火事 → [音読] クワジ

ほかにも例を示しておきましょう。

こもりゐ → 籠居　ロウキョ　　こちなし → 無骨　ブコツ　　うちうち → 内々　ナイナイ

ものさわがし → 物忿　ブッソウ（近世以後の表記「物騒　ブツサウ」とも）

また、〈大いに切る〉の意から「大切」という語も用いられるようになります。

「急所・存外・模索」なども、この時期に使われ始めた和製漢語です。そして、「堂上」「騒人」という重箱読み[20]や、「今様」「臥料」などの湯桶読み[21]もこの期に増加していきました。

漢字が浸透していくにつれて、漢語が意味を変化させ、今日のような語義が生じた例を次に少し示しておきましょう。

「商売の才覚がある」という「才覚」は、もとは漢籍に見られる〈才能と学問〉の意の「才学」に由来します。日本では、古くは「学」の方に重点が置かれ、〈学問、学識〉の意で用いられましたが、中世以降は「才」に重点が置かれるようになり、〈知恵のすばやい働き、機知・工夫などにすぐれている〉意に変化していきました。

又五郎男を師とする外の才覚候はじ。（徒然草　一〇二）

「学」は呉音「ガク」、漢音「カク」で、「才学」は本来漢音読みで「さいかく」と発音されていました（『日葡辞書』Saicacu）。そのため、「学」に重点がなくなったこともあって、次第に「才覚」と表記されるようになりました。

「元気」は和製漢語の「減気」〈病気の勢いが衰えること〉に由来するようです。

既に祭畢て後、師の病頗る減気有て、祭の験有に似たり（今昔物語集　一九・二四）

古くは「減気」と書かれていましたが、〈万物の生じる根本の精気〉を意味する漢語「元気」と同音であることから、この表記が用いられるようになりました。このほか、「験気・元喜」などと書かれることもありました。

もう少しだけ簡単に列挙しておきましょう。

覚悟〈迷いを去り、道理を悟ること〉 → 〈心構えをすること〉

用心〈心遣いをすること〉 → 〈万一に備えて注意すること〉

落度（もと「越度」）〈障害を越えて渡る → 過所（関所）を通らずに越える〉 → 〈手落ち〉（呉音「オチド」）

分際（もと「ブンサイ」）〈けじめ、限度〉→〈その人・物に応じた程度、身分〉

笑止（もと「勝事」漢音「ショウシ」）〈世にも珍しい、すぐれたこと〉→〈異常な出来事〉（「笑止」は当て字）

意味の変化に伴って[22]字音の交替したものとしては、「気色」が呉音「ケシキ」から漢音「キショク」となった例があります。「ケシキ」は〈物の外面のようす〉（江戸時代以降は「景色」と書かれます）、〈心の内面のようす〉を前代では表しましたが、後者の〈人の気分・気持ち〉を意味する場合、漢音の「キショク」が用いられるようになりました。

鎌倉殿の御気色も其儀でこそ候へ。（平家物語　一二・泊瀬六代）

一三世紀に栄西・道元などの禅宗の僧侶が入宋し、中国江南の浙江地方の漢字音を新たに日本に伝えました。これを[23]「唐音」（「トウオン」とも）と呼んでいます。これによって、「挨拶・玄関」などの禅宗に関係する語のほか、「蒲団・提灯・暖簾（のちに「ノレン」）」など生活に関連する漢語も広く普及していきました。

亭　瓶　鈴　湯婆　行灯　行脚　杏子　羊羹　普請　緞子　納戸　西瓜　饅頭　胡乱　栗鼠　竹篦　和尚　外郎

唐音とは「唐土（中国）の音」という意味ですが、この語は漢音より後の時代の中国漢字音を広く指しています。

板屋の上にて烏の斎の生飯食ふ。（枕草子　さわがしきもの）

「生飯」は仏教語で、これを当時の中国音によって「さんばん」（「さんば」「さば」）と発音していたようです。このように、古くは一一世紀前後から垣間見え、その後江戸時代に至るまでの中国音に基づく漢字音を総称して「唐音」とも、また「唐宋音」とも呼んでいます。室町時代には「宋音」、江戸時代には「華音」などと称せられることもありました。いずれにしても字音の体系的な伝来というのではなく、特定の語についての読み方として日本語の中でも用いられるようになったものです。現代でも身近な唐音による漢語をさらに挙げてみましょう。

「子」は[24]呉音・漢音ともに「シ」で、「格子・骨子・冊子・障子・調子・拍子・帽子」などに用いられていますが、唐音の「ス」も

「様子・椅子・扇子・緞子」などに見られるほか、「ツ」でも「脚踏子・火榻子・面子」のように用いられました。字音では読みにくいために、「キャタツ」は「脚立」、「コタツ」は「炬燵・火燵」などとも書かれていますが、このような例は「石灰」を「漆喰」と当て字する場合にも見られます。唐音では「脚・踏」のように入声韻尾が消滅していることが特徴の一つですが、これは「木綿」の「モ」、「喫茶」(「喫」漢音「ケキ」)の「キ」にも見られます。ただし、後者の「キサ」はのちに「キッサ」となって、「キツ」という慣用音を持ち、「満喫」のように用いられるようになります。

唐音の漢語は中国から借用した字音語ではありますが、呉音・漢音という日本漢字音の伝統的・体系的ワクグみ[25]から見ると、漢語と言うよりも一種の外来語といった方が実態に合っているかもしれません。「餃子」「焼売」ともなると、はっきりと外来語と意識されますが、それに近い感じが当時にもあったのではないでしょうか。

武士が台頭したことで、彼らが好んで用いる特有の言葉として「武家詞」が用いられるようになりました。「射られる」を「射させる」と表現した例があるほか、漢語を多用して重々しく表現したり、忌み詞[26]を使ったりすることがありました。たとえば、「退く」「引く」を嫌って「ひらく」と言いました。

急ぎ、いづかたへも御ひらき候べし。[27]（保元物語　中）

この「ひらく」という言い方は、現代でも「鏡びらき」「会をお開きにする」のように、〈割る〉または〈終わる〉の意で用いられているものです。縁起をかつぐのは今も昔も変わらないということでしょう。

（沖森卓也氏の文章に基づく）

（注意）文中の古典資料の文例・語例のフリガナは歴史的仮名遣いに基づいています。

問一　傍線部(2)「和語と仮名がこの時代を特徴付ける」とは平安時代とどういう点で変わったから言えるのか、**解答用紙**に説明しなさい。

問二　傍線部(3)『阿弖河庄上村百姓等言上状』、傍線部(5)『平家物語』、傍線部(9)『徒然草』、傍線部(27)『保元物語』は、どういうことを示す資料として用いられているか、それぞれについて次の**ア**～**オ**から選ぶとするとどれがもっとも適当か、その記号を**解答用マークシート**に答えなさい。

ア　庶民の一部にカタカナが実用的な文字として習得されていた例

イ　新たに中国の浙江省の漢字音が日本に伝えられた例

ウ　書き言葉に和文のための言葉と漢文訓読語が融合して和漢混淆文が生じた例

エ　連体形活用語尾「る」が脱落した例

オ　武士が台頭して特有の言葉が用いられるようになった例

問三　次の**ア**～**オ**の文章は、18頁の中略部分で、鎌倉時代の日本語に関する説明をしている文章です。傍線部(6)「係り結びの消滅」、傍線部(7)「『イ』と『ヰ』、『エ』と『ヱ』の混同」を説明するものとしてもっとも適当な文章を選んで、その記号を**解答用マークシート**に答えなさい。

ア　活用語を連体形で言い切る「連体止め」は体言止めの一種で、話し手の詠嘆・強調を表す平安時代の修辞法の代表的なものでした。『紫式部日記』(一〇一〇年頃成立)には連体止めの例が多く見られます。

いと白き庭に、月の光りあひたる、様態(やうだい)、かたちも、をかしきやうなる。

ふたたびばかり誦(ず)せさせ給ひて、いと疾(と)うのたまはせたる。

このような連体止めは、聞き手の注意を引くという表現であったために、平安時代を通して好まれて多用されてい

くうちに、連体形特有の表現価値が薄れていくとともに、文の終止形式として一般化していったものと考えられます。院政時代に入ると、ふつうに文末形式として用いられるようになりました。

御髪ハ新カフソリシテ剃奉リ給ヒケル。（打聞集　六）

即チ皆経ヲヨミタテマツリケル。（法華百座聞書抄）

イ　係助詞「なむ」「ぞ」「か」の結びには連体形がくるべきところですが、連体形が終止形をも兼用した結果、連体形で結ぶことの意義が失われ、連体形以外で呼応する例も現れました。

物入レハクヒ、イレヌトキニハムナシクテナムスコシ侍リケリ（宝物集）

（物入れば食ひ、入れぬ時には空しくてなむ過ごし侍りけり）

山置かれたりけるぞ「罪すこし軽（かろ）みにけむかし」とはおぼゆれ（古本説話集　上・八）

タレカコレ主人ナリ（正法眼蔵）

このような係り結びの乱れは「こそ」にも影響を与えていきます。「こそ」の結びは古くから「古止古曽与之」（東遊歌・駿河舞　九二一）〈事こそ良し〉のような例外的な表現も見られましたが、そのような乱れは院政時代以降次第に増加してきました。

ひとりこそ定に入りては聞かざりし（梁塵秘抄　二）

太子コソ此両三日王城ノ南ナル山荘ニ遊セ給ナル（草案集）

ウ　平安時代には接続助詞が多用されていましたが、鎌倉時代には接続詞がほかの品詞から転用されて広く用いられるようになりました。ただし、和歌などの韻文ではあまり用いられず、もっぱら散文に使われ発達しました。「ただし・しかも・ならびに」などのように、漢文訓読語から一般化したものも多く見られました。

十月、諸社の行幸、その例も多し。ただし、多くは不吉の例なり。（徒然草　二〇二）

ゆく河の流れは絶えずして、しかももとの水にあらず。（方丈記）

エ　定家が取り上げた仮名について見ますと、すでに述べた平安時代の「オ・ヲ」の同音化、ハ行転呼音に加えて、「イ・ヰ」「エ・ヱ」の同音化が一般化していたことが見て取れます。「イ・ヰ」「エ・ヱ」の混同は語頭以外ではすでに平安時代から見えていましたが、鎌倉時代初めになると、語頭でもその混同が多く行われるようになりました。「イテ(率)」「酒ヲノマセテエ(酔)ハス」(中山法華経寺蔵『三教指帰注』院政末期点)のように見え、一三世紀には「イ・ヰ」は[i]、「エ・ヱ」は[je]に統合されました。それぞれ「ヰ」ではなく「イ」[i]に、「ヱ」ではなく「エ」[je]に統合されたのは、唇音性の後退によって[w]が脱落したためと考えられます。

オ　次代の室町時代以降混用が著しくなる「ジ・ヂ・ズ・ヅ」の四つ仮名も、「ジ・ヂ」「ズ・ヅ」において混同が始まっていました。観智院本『類聚名義抄』(一二五一年写)に「クヂラ」「クジラ」の両様の表記が見え、語のレベルでは古くから「ジ」と「ヂ」、「ズ」と「ヅ」が交替することがあったようです。日蓮(にちれん)(一二二二～八二)の消息にも「嫁がづ」「ぢうあう(縦横)」などと混同した例がかなり見えることから、関東では四つ仮名の混乱がいち早く起こっていたかとも言われています。

問四　傍線部(8)「言文二途の時代」とはどういう時代か、**解答用紙**に答えなさい。

問五　次の**ア**～**オ**の語は、傍線部(10)「東国方言」、傍線部(12)「当て字」、傍線部(13)「抄物書」、傍線部(18)「捨て仮名」、傍線部(19)「和製漢語」、傍線部(22)「字音の交替」、傍線部(23)「唐音」、傍線部(26)「忌み詞」などの例として用いられているが、それぞれどの例として用いられているか、もっとも適当なものを選んで、傍線部の番号を**解答用マークシート**に答えなさい。

ア　扇子　　**イ**　目出タシ　　**ウ**　無骨　　**エ**　間夕　　**オ**　気色

問六 傍線部(11)「藤原定家」について、次の問に答えなさい。

(1) 藤原定家が校訂した例としてあげられている文学作品を次の**ア**～**オ**からもっとも適当なものを選んで、その記号を**解答用マークシート**に答えなさい。

ア 『宇治拾遺物語』
イ 『源氏物語』
ウ 『古事記』
エ 『平家物語』
オ 『雨月物語』

(2) 藤原定家が編み出した仮名遣いは何を参考にして考えられたというのか、**解答用紙**に説明しなさい。

(3) 藤原定家が編み出した仮名遣いと歴史的仮名遣いとの違いを文中の例に即して**解答用紙**に答えなさい。

問七 傍線部(15)、傍線部(16)の「子」は小野篁の解読によればそれぞれどういうものとして読んでいるか、**ア**～**オ**からもっとも適当なものを選んで、その記号を**解答用マークシート**に答えなさい。

ア 音
イ 訓
ウ 待遇表現
エ 異体字
オ 漢語

問八　傍線部(20)「重箱読み」と傍線部(21)「湯桶読み」との違いを対比的に示してそれぞれ**解答用紙**に答えなさい。

問九　傍線部(23)「唐音」と傍線部(24)「呉音・漢音」との位置づけの違いがよくわかるようにそれぞれ**解答用紙**に説明しなさい。

問十　傍線部(1)「スイタイ」、傍線部(4)「ジョジョ」、傍線部(14)「ニョジツ」、傍線部(17)「ビボウロク」、傍線部(25)「ワクグみ」のカタカナの部分を漢字に直して、**解答用紙**に答えなさい。